

## 書 評

ナザン・マクスーディヤン著

## 『オスマン帝国末期の孤児と貧困児』

(Nazan Maksudyan.

*Orphans and Destitute Children in the Late Ottoman Empire,*

Syracuse University Press, 2014, 232p)

田 畑 和 音

イスタンブール・ケメルブルガズ大学で准教授を勤める著者、ナザン・マクスーディヤンは、本書において、オスマン帝国末期の子どもに注目し、その遺棄と保護について論じる。中でも、本書で扱う対象は孤児や棄児、浮浪児や貧困児という、いわゆる「下層グループ」に属する子どもたちである。著者は、近代オスマン帝国においてこれらの子どもが、社会変容の一因となりえたことを示すため、年鑑、法令集、判例、外国人宣教師の定期刊行物等の豊富な史料を用い、社会に子どもがいかにして関与したかについて考察している。この試みは、1960年、フィリップ・アリエスの『〈子供〉の誕生<sup>(1)</sup>』が刊行されて以降、子ども史研究者の多くがアリエスの「子ども期の発見<sup>(2)</sup>」論を踏襲し、子ども自身の歴史的活動を詳細に分析してこなかった現状を踏まえている。

本書の構成は以下の通りである。

序 論 オスマン帝国の子どもによる「下層からの歴史」

第1章 児童遺棄政策

第2章 里子養育における子どもの声

第3章 孤児院の実態（ウスラフハーネ）

第4章 孤児院の国際化

結 論 歴史的行為者としてのオスマン帝国の子ども

まず序論では、オスマン帝国・トルコ共和国の子ども史に関する先行研究を概観する。著者は、先行研究では十分に検討されてこなかった、子どもの、社会・経済・政治面における行為者としての歴史に注目する。さらに、近代化が進む中で、当時のオスマン政府が、以前まで等閑に付していた孤児や貧困児の存在や労働力に関心を持ち、重要視し始めたにもかかわらず、子ども史研究の中でそのような子どもを扱った研究はほとんど存在しないということを指摘する。このため、本書では、孤児や貧困児の「声」を救い出し、近代史の新しい展望を示そうと試みる。

第1章では、オスマン帝国における児童遺棄の様相や、棄児に対する国家施策、さらに棄児の宗教

判別上の対立について論じている。オスマン帝国内では、ムスリムだけでなく、ギリシア正教会、アルメニア教会、ユダヤ人など、さまざまな宗教の信徒が各宗教リーダーのもとで、ある程度の自治を認められていた。そのため、子どもの遺棄や保護は、宗教共同体によって異なる様相を見せる。著者はこのことについて、1811年から1911年の、144件の児童遺棄記録を元に、子どもが遺棄された都市や場所、宗教、男女の割合などを分析している。例えば、遺棄された場所は、ムスリムはモスクの前が多いことに対して、非ムスリムは住民の家の前が多いなどの相違点がある。また、帝国末期に近代化が進行するにつれ、政府は棄児の誕生日登録などの人口管理を開始し、各共同体への介入を進めたが、このことは同時にムスリムと非ムスリムの論争を増加させた。警察は、棄児の宗教判別の目印を見ることなくムスリムと登録したり、非ムスリムは、登録のために棄児を警察に渡すことを拒んだり、双方が批判の対象となったのである。さらに、政府が福祉政策の一環として建設した、新しい棄児の保護施設では、ミルクの殺菌のような当時の近代的な技術を用いて、乳幼児の養育を行っていた。しかし、伝染病、栄養失調、乳母の無知や怠慢が原因で、施設内は異様な死亡率を示しており、組織化に伴う新たな危険が、乳幼児の生命を脅かした。著者は、これらの点に着目し、棄児が政治的・宗教的対立のメインアクターになりえたこと、また国の福祉・衛生・健康政策の対象となり、その影響を直接受けたことを指摘する。

第2章では、ベスレメ (Besleme) と呼ばれる家事労働を行う子どもたちの労働環境や、虐待の危険性を論じるとともに、それに対する抵抗を検討し、子どもたちの主体性に目を向けている。ベスレメは史料によって定義が異なることがあるが、本書では、「幼い時に裕福な家に預けられ、使用人として育てられる女子」のことを指している (p. 52)。主人と彼女たちは雇用者・被雇用者という関係ではなく、無賃金での仕事を求められた。引き換えに、衣食住の基本的な生活保護を受けられ、事実上の内縁関係に至る場合もあった。多くの女子の孤児はこのベスレメになるため、孤児院では家事裁縫が教授されたり、政府によって里子の法的な整備も行われた。家庭の中で孤立しやすい彼女たちは、常に性的搾取に晒される存在であり、さらに、世論からの批判は、主に不貞を犯した女子に向けられていたことが指摘されている。しかし一方で、著者は判例史料を通して、ベスレメがあらゆる手段で主人に抵抗したことについて検討している。例えば、1910年、外務大臣補佐アフメト・ムフタルのベスレメが脱走し、近所の家で保護されている所を発見された。主人が連れ戻そうとするのを彼女は拒み続け、最終的には保護された家のベスレメとなったという事例を述べる。著者は、この他にも放火、自殺、裁判での起訴等の事例を挙げ、ベスレメについて、生活環境の問題点だけでなく、それに対する抵抗をふまえて彼女たちの歴史を再構築する必要があると述べる。

第3章は1860年代以降に建てられた新しい教育施設、ウスラフハーネ (Islahhane) について論じる。ウスラフハーネは、新設されたドナウ州の初代総督ミドハト・パシャが中心となり建設された、孤児院・職業訓練施設である。孤児だけでなく、学校に通わない浮浪児、貧困児、軽犯罪を犯した子どもが収容され、共に生活し、識字教育に加えて職業訓練が施された。ウスラフハーネはミドハトによって建設後、帝国各地に広まり、1908年までに34もの施設が建設された。また、オスマン主義を主張

したタンズイマート期の改革者たちは、法律を制定し、ウスラフハーネにムスリム・非ムスリムを問わず誰でも受け入れるということを明文化した。著者は、帝国内でムスリムと非ムスリムの混合教育を行う初めての施設であることを指摘し、国家の政策と施設は密接な関係にあると述べる。施設の子どもたちは、訓練によって職人技術を身に付け、施設で製作したものを販売し、卒業後の資金も用意されていた。また、印刷業やプラスチックの練習など、当時の新しい技術の指導もあり、一部の施設では、技術向上のためのパリやリエージュへの留学制度も存在した。著者は、子どもを施設で管理することにより、都市の治安・衛生の改善、また、職業訓練により、国内の産業活動の発達を促したと評価している。さらに、国家と州の結びつきを密接にし、オスマン主義の思想を地域に浸透させる役割を担ったと述べ、社会の再統一の可能性を示したと意義付ける。

第4章は、1896年以降のキリスト教宣教団における、孤児の保護活動について論じている。1896年は、アブデュルハミト2世期に起きたアルメニア人虐殺の終息の年であり、この虐殺の影響で多くのアルメニア人孤児が出現した。そして、その孤児を守るために活動を盛んに行った団体が、欧米のキリスト教宣教団であった。孤児の救済によって自身の活動を広げるべく、各宣教団は対立しつつ孤児の保護を行った。中でも、アメリカン・ボード<sup>(3)</sup>は、アルメニア人虐殺をきっかけに大きく活動を伸ばし、1898年には60近くの孤児院を建設し、約4000人の孤児の保護を行った。著者は、アメリカン・ボードの史料から、宣教団が行った孤児の救済は、決して博愛・慈善行為の側面を有しただけではないことを指摘し、宣教団による「孤児の保護」という目的は、宗教の教化と改宗の文脈を含むと述べた（p. 126）。そのため宣教団は、アルメニア人の孤児のみを優先的な救済の対象とし、他の大人や子どもの保護は下位であった。また、孤児はイスタンブル・イズミル・ブルサなど規模の大きく、継続的に運営される孤児院に移送された。対して、オスマン政府も、アルメニア人孤児を改宗させることによる宣教団の拡大に危機感を持ち、これを防ぎ、国内の外国宣教団を管理下に置くために委員会を設置した。アルメニア教会も、政府や外国の宣教団に対し、自らの宗教的アイデンティティが奪われることに脅威に感じており、10余りの孤児院を建設するなど、独自に孤児救済を行った。著者は、各組織における孤児救済の「競争」は、孤児の当面の要請に注目したのではなく、孤児の将来性を見越して行われていた、と評価する（p. 129）。

結論では、序論と同様に本書の目的を、「(子どもの) 忘れ去られた声と歴史の構築に貢献した経験を救う」という点に置き（p. 166）、各章の内容をこの目的に沿ってまとめている。著者は、史料収集は困難であるということを指摘した上で、これまで完全に静寂であった子どもの声を心に留めることに成功したと述べる。

以上の要約を踏まえ、本書の意義はどのような点に求められるか考察する。著者は、本書の中で何度も「声」という単語を使用する。しかしながら、著者自身も指摘しているように、子どもの声、ましてや棄児や孤児、貧困児の声が直接記されている史料を見つけ出すことは、容易ではないだろう。著者はあらゆる史料を用いて、この困難を補っており、判例を元に実際の子どもの抵抗を示している第2章は、その成果といえる。一方、第1章・第4章では子ども自身の声と考えられる史料は提示さ

れておらず、第3章では、子どもが書いたスルタンに対する感謝状を提示するものの、それが子どもの「本当の」声とは考えられないと指摘している。このように、子どもの声が必ずしも提示、検討されていないという課題は残るが、そのことが本書の価値を下げるわけではない。著者はこの目的を念頭に置いているため、常に子どもの視点から各々の生活環境を考察し、大人・地域・政府との結びつきを捉えようとしている。そのため、タンズィマート期以降の政府主導の福祉政策や施設建設においても、その対象となる子どもへの影響・子どもが及ぼした影響を詳細に分析しており、オスマン帝国近代史に新しい視点を提供している。この点において、子どもの歴史的な位置付けは成功しているといえるであろう。

このように、著者の独自の着眼点から見る分析は興味深い。例えば、第1章においては、棄児の研究は従来一都市のみが対象であったが、著者は国内中の児童遺棄のデータを収集することで、遺棄が多い都市の比較など、研究上の新しい視点を提示する。また、棄児の宗教身分の議論において、具体的な事例を示しつつ、棄児が各共同体の宗教的な対立の要因となりえたという著者の指摘も重要である。多民族・多宗教国家であったオスマン帝国は、19世紀以降、民族・宗教間の対立が各地で増加し、政府の主要な関心となる。そのため、子どもと宗教対立の関係に着目することは、近代史において子どもの位置づけを明らかにする手がかりを与えるだろう。

一方、以下の点において若干の不満が残る。著者はひとつの地域に限らず、オスマン帝国各地の史料を用い、新しい分析を行っているが、その分析の背景について不明瞭な点が多い。例えば、第1章の児童遺棄の表では、男女の割合が6%の差しかないことが分かる。イズミルのギリシア人共同体における児童遺棄の先行研究<sup>(4)</sup>では、圧倒的に女子の方が多いことを本書で示しているにもかかわらず、その違いについての考察がなされていない。また、第3章では帝国中のウスラフハーネの設置都市や建設年が分析されているが、最初に建設されたと示されるトラブゾンの施設について全く言及されておらず、二番目以降の考察に留まっている。このように、本書の分析は、今後子ども史研究で参照されうるであろう新たな論点を提示しているにも関わらず、その考察が十分にされていない。

同じく本書の書評を行ったモリソン<sup>(5)</sup>も指摘しているように、本書はオスマン帝国近代史に対して、新しい論争を示したわけではない。しかし著者は、既存の近代史の流れに沿って、子ども、中でも社会から周縁化されていた子どもの視点を含めた研究を行った。このような研究は、時代における政府と民衆の関係を、相互の視点から検討することを可能にし、より立体的に時代を描き出せる点において、有益である。また、周縁化された子どもが、社会との繋がりを持つ過程における、具体的な詳細な考察は、他地域との比較研究においても一助となるであろう。子どもを、成長途中の保護される存在として捉えるのではなく、社会の一員として捉え、その役割を紐解こうとした本書は、今後のオスマン帝国子ども史研究の、さらなる発展の道を開く一冊となるであろう。

注(1) フィリップ・アリエス著 杉山光信・杉山恵美子訳『〈子供〉の誕生—アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』みすず書房 1980年

- 
- (2) アリエスは中世の芸術作品を分析し、17世紀以前に描かれる子どもは、背丈以外に子ども期の特徴を有していないことを指摘する。中世の子ども期の不在と、それ以降における子ども期の発見という枠組みを述べた。
  - (3) 正式名称は American Board of Commissioners for Foreign Missions。北米最初の海外伝道組織で、1810年に設立後、アジアの各地に宣教師を派遣した。
  - (4) Vangelis Kechriotis, *The Greek Community in Izmir, 1897-1914*, Ph.D. diss., Leiden Univ., 2005
  - (5) Heidi Morrison, Orphans and Destitute Children in the Late Ottoman Empire by Nazan Maksudyan, *The Journal of History of Childhood and Youth*, vol. 8, no. 2, 2015 pp. 327-329